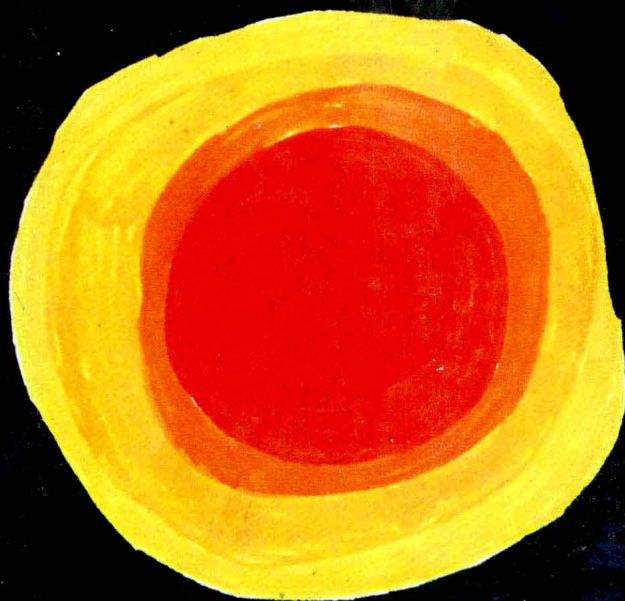


ヤニナ・ダヴィド著 松本たま訳

ゲッソーの四角い空

戦時下ポーランドの少女時代



未来社

松本たま

大正6年 東京に生まれる

昭和13年 津田英学塾卒業

昭和29年 上智大学大学院西洋文化
研究科修士課程修了

昭和22～58年 上智大学勤務，主と
して『ソフィア』を編集

訳書 カーディナル・ニューマン著
『十字架の道行』、『聖母の月』
(昭和21年，中央出版社)，ア
ルフォンス・デーケン著『第
三の人生』(初版昭和50年，改
訂新版昭和59年，南窓社)

現住所 182 東京都調布市多摩川町
7-12-1

ゲッターの四角い空

一九八五年 三月一日 第一刷

定価一五〇〇円

著者 ヤニナ・ダヴィド

訳者 松本たま

発行者 西谷能雄

発行所 株式会社未来社

東京都文京区小石川三十七-二

印刷 第一印刷
製本 今泉誠文社

Printed in Japan

ヤニナ・ダヴィド 松本たま訳

ゲッターの四角い空

——戦時下ポーランドの少女時代

未来社

A Square of Sky/A Touch of Earth

Part 1: A Square of Sky

by Janina David

Copyright © Janina Dawidowicz 1964, 1966

All rights reserved

First published by Penguin Books Ltd.

Japanese translation rights arranged
with Penguin Books, London, through
Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo

熟しかけのリンゴとナシの香りがその小さな部屋中に広がっている。窓際に一列に並んだ果物のほおに太陽は美しい色とりを添えることたろう。半開きの窓の向うには果樹園か夢の中でさわめき、その果樹園の向うには森のささやく壁か見張り番のように立っている。家のどの窓からも、外のとの道からも、この村を囲う黒い並木が見える。木々は家のすぐ前の道まで迫っている。背の高い黒いもみと松はざらざらの肌がやにて粘っており、堅いかしの木のつやつやした、切り込みのみごとな葉は森で王様ごっこをするとき格好の冠になる。そしてそのかしのこふだらけの幹と幹のあいだで、緑の夏衣をまとってゆらゆら踊る王女のような花嫁のような白かばは、秋の初めになると黄金色の滝に変わり、そして夏休みは終る。そうすると私は、自分の夏物語の大団円を考案し、すべてのヒロインたちに翌年まで出番を楽しむに待っていてもらうことにするのである。

夜気はカエルの歌声でわななき、野犬はかん高い声で合唱する。窓の外では一羽の夜鳥が新しい歌のけいに余念がない。そして部屋の中では一匹の蠅がねばねばした細長い紙ぎれにひっかかって荒れ狂うようにぶんぶん唸っている。ベランダからはひそひそ話と息を殺したようなくす笑いが増えて来る。みんなそこに集まって、そわそわしながらステファの命令か下るのを今やおそしと待ち構えている。今夜も果樹園へ遠征にでかけるところなのだ。

ステファが小声で言う——「眠ってるかどうか見て来るからね。」

もう一つの声か聞える——「僕もいくよ。」

タデクだ。胸かどきどきする。とっさに私は寝相をよくして、髪の毛を後光のように広げ、シートをあごのところまで引き寄せて、おとぎばなしの本に出て来る「眠れる森の美女」のように両手を合せる。戸かきしむ。目を細めに開けると、ステファがろうそくを持って立っているのが見える。そしてその後ろにはぼさぼさの黒い髪の毛のかたまりとタデクのびかびか光る目が見える。二人は無言でじつと私を見つめている。こちらはかたずをのんてにこやかに夢路に遊ぶ。戸が締まる。

「よく眠ってるわ」とステファ。

「きれいな子だなあ」とすかさずタデクが言うと、みんな押し殺したような笑い声をあげてヘランダの壁につかまって降り、果樹園の中へ散らばっていく。それから歌を歌ったりギターを弾いたり木の間に隠れん坊をしたりするのだ。夜中になると、ステファはまだまだよく熟していないリングを前掛けにいっぱい入れて帰って来る。

みんなて私の部屋の窓の下を通っていく。でもその声はだんだんにかすれ、やかて道の向うの木々のささやきと混じり合ってしまう。私は夢心地でみんなのあとを追っていく。……あれは一九三九年の夏のこと。私は九歳だった。

クロスウェイズ(Krzywiz)はポーランドの代表的な村で、およそ百軒の農家と別荘か森の中に点在していた。本通りには、雑貨屋兼郵便局が一軒と、ヒヤーカーデンのある旅館が二軒あった。

二年前のある夏の夜、家の製粉所が全焼して町中まるで花火大会のようになり、そのために突然家運が傾くと、母はもうこれ以上外国で夏休みを送ることはできないと思った。そういうわけてステファと私だけがクロスウェイズ村の白いしっくい塗りの二つのちっちゃな部屋で二度目の夏を過していた。その別荘は三つの小さいアパートに分れて

いて、私たちのほかにもう一世帯、乳母と二人の男の子が住んでいた。三番目のアパートを使用していたのは家主の娘たちだった。二人とも年ごろで、姉のクリスティナは金髪碧眼、妹のヤニスは、私のように、髪の毛目の色も黒かった。興味津々だったのは、お母さんが二人いて、二人とも生きているということだった。でもクリスティナのお母さんはもうその家にはいなかった。きつと当時そこに住んでいたヤニスのお母さんが嫌いだったからだだろう。二人の姉妹は夏休みをその別荘で送り、借家人たちか衆しく過せるように心を配っていた。前の年の夏、ステファと私ここへ来てまもなく、クリスティナたちの十三歳になる弟のタデクもこのアパートへやって来た。私はその子を見るなり自分のヒーローにしてしまった。彼は私より頭の分だけしか大きくなかったから、年の割にはすいふん小柄だったに違いない。黒い縮れ毛は濃い眉毛の下まで延びて来て目に覆いかぶさっていた。それを見て、私は天才の火がその下にくすぶっているのだと思った。タデクはカーキ色の半ズボンを履いていた。それはコーヒー豆のように日焼けして小麦色をしており、とうも一張羅らしかった。私は誰からも監督されないすてきな存在とは彼のような人のことなのだと思って羨ましさ溜息をついた。タデクは木や塀

をよじ上り、カエルのいる池で泳ぎ、はだして水たまりを跳び歩き、何時間も行方不明になった。時には木の上で一晩を明かすこともあり、道具小屋のおかくずの中で飼猫といっしょに丸まって寝ることもあった。

私はやっきになってタデクのやるとおりやってみて感心してもらおうと思ったか、しかし何度か試したあげく、けがをしたり、日焼けして炎症を起したり、包帯をしたりして、とうとう退却する羽目になった。私はステファを責めた——お休みてさえも全然自由に遊ばせてくれないで、息の詰るようなしつけをするからこんなことになってしまったのだ、と。

町で私の生活を取り締まっていた規則は田舎でもほとんど緩和されなかった。からからに乾いた暑い日ははだして駆けまわってもいいことになっており、少しぐらひは就寝時間を延ばせる晩もあった。しかし起きているうちはまだずっとステファの監督下であり、ステファはとにかく私と二人きりだったから責任重大だと思っていた。

食事の時間は決っていた。ステファはしつと見ていて、私がお皿のものをきれいに食へようとしなかったりすると、さっそくスプーンで食へさせる。私のことを幾つになっても子供扱いにして、相変わらず服を着せたりお湯を使

わせたりし、午後になると、どんなに楽しいゲームの最中でもむりやり昼寝をさせるのである。友だちか笑いざめきながら駆けまわっているのが見えるのに、私は折りたたみ椅子に横になり、怒りに全身をこわはらせて、なめし皮のような色になるまで日光浴をし、食へものと恨みを口いっぱいはおはり、世を憎んでいた。

夏の日々は平穩無事に流れ去っていった。けいこかなかったので、私は松林で好きな本を読み返した。新しい詩や物語を書き、よその子供たちといっしょにキノコ取りにいったり池のまわりでカエルをつかまえようとしたりした。私は蝶を採集し、そして庭の中の木の小屋に住んでいた管理人の娘たちといつまでもゲームをやった。子供たちの数を数えあげるまでには何日もかかり、信しくいことだかみんなで十人いることかわかった。大ききだけ違う似たり寄ったりの十人の少女たち。どの子も金髪で、目は青く、やせて、はにかみやだった。夜は二つの部屋になんとか納まり、朝まだきにまたこぼれ出て来る——きいきい言いながら、這ったり、跳ひはねたり、一番小さいのをかかえたりして。

日曜日には、父母はステファかその週の私の品行報告を

するのを聞きに來た。母は私がよく食べたかどうか知りたがり、父はいつも、手に負えないようなことかかったかどうか尋ねるのだったが、私はステファの説明を聞きながら毎週のように身ふるいしたものだ、ステファはけっして口の堅い人ではなかったからである。

週に一度は森で野營するホーイスカウトが私たちの庭で焚き火をしたので、私たちは夜か更けるまで燃える丸太を囲んで歌を歌ったり物語に聞き入ったりしていた。これは私の夏休みのハイライトだった。夢うつつてはあったが、私はステファにもう少しここにいさせてとねだって、火のぐるりを取り巻く人ひとの顔を見つめ、合唱の仲間に入り、星が私たちの歌声に耳を傾けている暗い青空へ上っていく煙のうすを眺めていた。私たちのまわりでは森が何千本もの腕を振りまわし、松の木々は、うなずきながら、ささやきながら、私たちの小さな世界を見守るように、抱擁するように取り囲んでいた。

私は、松林の中で、柔らかな夕のクノヨンに長々と寝そへって、わか家へ帰る日か近づいて來たことを思った。楽しみにしていることが幾つかあったのだ。ちょうど町からここへ来る前に、私はディズニーの『白雪姫』の新

しい映画を見た。この別荘の隣りの人たちがその歌のレコードを持っていて、私は全部暗誦してしまった。そればかりでなく、私はこの夏ずっとその主役を演じたのである。

ステファは私が生れなからの女優だと幾度も言ったが、それはあなちお世辞でもなかったようだ。私はふたのしてない井戸にもたれて静かな水底に映る自分の姿を見つめていた。空の青い円を背景にして、ナンの木の枝と、その枝の下に自分の顔が見える。まるで映画のようだと思つて私はその場面にふさわしい歌を歌い始めた。しかしやかつて來て來て私を追い払ったのは、王子様ではなくてステファだった。

「自分の姿にこんなに惚れ込んでる子を見たことがない」とステファはつぶやいた。私はやつとのことてからだを引き離し、井戸に石を一つ投げ込んだ。輝いている青い水面は丸い口となり、空とナンの枝と私を発作的に飲み込もうとしている。私はこわくなってそこを引き揚げた。

でも私はそういう歌を全部教室で歌えるのだ。それこそ私の得点になる。私は教室でのただ一人の手ごわい競争相手のアレラのことを考えた。アレラは私のように髪の毛も目の色も黒かったが、冷静で高慢ちきな子だった。どの科目でも二人は首席を争った。ただ絵だけはアレラのほうが

確実に上だった。アレラのお父さんは有名な画家で、アレラはたしかにその才能を受け継いでいた。アレラが選ぶ色はクラス中か選ぶものとはいっても違っていて、みんな目を見張るはかりだった。アレラが描く人物は、歩いていても立っていても座っていても、いつてもいきいきしていて、何をしているところなのか一目瞭然だった。

私は自分のやっていることが腹立たしくなってきた。私はいつも細かいところまで描写して高尚な趣きを添えようと思ったのだが、そのかいなく、私の描くものは生彩を欠いていた。どれもこれもつまつぱったかしみたいで、見るからにぎこちなさそうに棒立ちになっており、のつぱらぼうのからだはまるで活気がないのである。

勝てないことがわかったので、私はアレラの親友になろうと決心した。しかし、仲良しになって二、三週間もすると、信じられないことなから、私はアレラが私なとと友だちになりたくないことを認めないわけにはいかなくなつた。アレラは無口で、冷静で、主に学校以外に友だちがあり、また、クラスでは私よりほかに一人好きな子がいた。私はこれかとうしても腑に落ちず、趣味の乏しい証拠だと思つた。

アレラが音痴だったことか幾分は気休めになった。私は

声かよくて、詩を書くのと同じくらい歌を歌うのが好きだが、それは大した取柄だ。『白雪姫』の歌でも歌えなきゃと大成功たろう。……

私はほかの同級生たちのことに思いを馳せた。イッツァクはまた同じ教室にいるだろうが、でも今年は並ばないことにしよう、罪のつぐないはもうすんだのだから。そんな考えを持つなんて悪いことだと思うと、ほおか赤くなってきた。

去年の初め私は教室でマルゴと同じベンチに座った。マルゴは気の小さい、顔の青白い少女で、最初から私に永遠の愛を誓っていた。あいにく彼女はおしゃべりだった。絶えず自分か私の目に止るようにつとめていたところ、担任の先生の目に止ってしまった。先生は私たち二人を引き離すことにした。

後ろの席に並んでいたのは二人のイッツァクだった。太イソツァクは悪玉で、クラスの誰よりも罰を受けることが多く、全然じつと座っていられない子。小イソツァクのほうはうすのろで、学校中で一番汚くて、臭くて、知恵おくれの生徒だった。小イソツァクと並びたいと思う者は一人もいなかった。だから、並びなさいと先生に言われたら、つまり重い罰をもらったことになる。

担任の先生は私を後ろの大イノツァクの隣りに移すことに決め、小イノツァクは前に出てマルコと同じヘンチに座ることになった。私は内心ひっくり仰天してしまった。大イノツァクが歯を見せて笑いながら跳ひかかると、クラスのあちこちでかみ殺したような忍び笑いが聞えた。事態は先生か思ったよりずっと深刻だったのだ。

私たちのクラスでは、学年の初めに男の生徒か「カールフレント」を選ぶ習慣だった。男子は女友だちに対するあこがれの気持を多少おおびらに宣言していて、二つの陣営でたひたひ起る「戦争」では、「意中の人」をつかまえることを特別にめざしていた。そうしたからといって、競争相手が真剣になって挑戦するのをやめるわけではない。

この前の「大戦」のとき、幼稚園の昔から私の騎士だったカールは到頭、大イノツァクになぐられてしまった。私はカールの鼻にハンケチをあてかって血を拭い、私の気を引くために敢闘した大イノツァクに対しては実によそよしくふるまった。大イノツァクは、辛抱強く、繰り返し繰り返しヘンチの下から私のほうへ銀紙に包んだチョコレート屈けてよこした。私は銀紙を集めていたので、これはなかなか大変な誘惑だったか、とにかく名誉にかかわる問題だし、クラス全体が目撃してもいたので、私はチョコレー

トを蹴り返し、知らん顔をしていた。ところが私はついに先生の命令で大イノツァクと並はなければならなくなってしまったのである。

この急場を救ってくれたのはマルコだった。小イノツァクと並ぶのたと思っただけでマルゴは気が転倒して泣きぐすれてしまった。それを見ているうちに名案が浮んだのだ。私はおすおす立ちあかって、小イノツァクと並んでもいいでしょうかと聞いた。クラスの者たちは耳をそばだてた。先生は啞然としたように、罰を受けるのはマルコなのだと言った。私は小イノツァクかとうなっているかと思つてちらつと見ると、彼は見られたのかうれしくて、間抜けた顔に笑みを浮べていた。そこで私は、今度はしっかりと声で、マルコはほんとにかわいそうだ、大イノツァクはけっしていい相棒ではない、それにとにかく自分は誰の隣りになつても構わないと主張した。クラスの中にはくすくす笑う者もいた、私は一生懸命になつて、小イノツァクのお隣りになれさえすれば勉強を見てやります、と申し出した。

先生は感激して、私の申し出に同意した。そしてクラスの日誌に、私は己れを捨てて友のために尽すけなげな人間だという所見を書いた。この名誉な記録は両親にも送られ

た。

私は自分の本をその別の席に移した。大イノノックは悲しみに打ちひしがれたような顔をした。みんな彼の失望を見てよろこび、私の偽善をなした。マルコはまたもうすぐまっつてうれし位きに位いた。小イノノックは始めから終りまで座ったままにここにこして成行きを見守っていた。

それから何カ月か、私はこんなけなけな行動を取るのではなかったと後悔することかたひたひあった。悪臭は天まで届きそうなのに、せひとも必要なハノケチというものを小イノノックは使ったことかないのである。ところで彼の宿題は手につけられないほど多かったのて、私はどうしても一役買わなければならぬと思つていさみ立った。毎日のように宿題を直してやり、おどしたりすかししたりしているうちに、驚くなけれ満足な結果あらわれるようになって来た。私は自分の宿題を彼に写させたといつてよく叱られたけれども、先生は学年末まで私をその席に置き、もう一度、私の献身的な努力の結果、小イノノックはみんなといっしょに進級できると発表した。

私はこの小さな出来事を考えながらも二度と小イノノックには会わないですむようにしようと思つた。でも、もちろん近いうちに会うことになる、二週間たてばとうせ学

校へ帰るのだから。そして、家に帰るのだ。そう思うとわが家か急になつかしくなつて来た。もの心がついてからというものの、私の考えるわか家とは部屋か四つある、家具で埋まった二階のことだった。その後ろには小さな玉石を敷いた中庭があり、片隅にはほこりをかふった小さな緑の木立か生き残ろうとかんばつていた。塀の片側にはスタニスラウという管理人の住む小さな二間の家があった。スタニスラウはこのちっぽけな小屋に妻と、鍛冶屋の徒弟をしてゐるハンサムな長男からかにまたのよちよち歩きの幼な児まで総勢七人の息子たちとなんとか納まつていた。私はその人びとが、まとめると立方形になる私の人形の家の木の家具一式のように、うまくはまり合つて暮しているところを想像した。

私は台所の窓からスタニスラウの年下の子供たちか二、三人の女の子と遊んでいるのをいつも見ていた。みんな騒騒しくて、みすばらしくて、玉石の上で追っかけっこをしたり、ふたのしてない溝を跳び越えたりしていた。大声で何度も何度も叫んだり跳んだり歌ったりして遊んでいるのだ。流しの軽業師や乞食かこの中庭へやって来ると、子供たちはぐるっと取り囲んで、私たちが窓から投げる小銭をいっしょになつて拾つてやる。遊ほうよ、と声をかけられ

ることもあったか、もちろんのこと私は絶対にいっしょに遊んではならなかった。

中庭のはすれの塀の向うには大きな黒い建物か立っていた。それは工場だった。そこで何を製造しているのかさっぱりわからなかったので、その工場は、建物全体を揺かすどしんどしんというリズムカルな打音を出すためにのみ存在するのかもしれないと思ったりした。正午になると煙突から鋭い汽笛が流れ、建物の中の騒音が止る。このふしぎな建物の窓は大抵は締まっていて、いつもすすけてどす黒い色をしていた。たまに若い人が窓にあらわれ、うす汚い顔を突き出してあたりを見まわし、そして、突然くるっと振り向いてかんがん鳴り響く後ろの暗やみの中へ跳ひ降りがけにこちらの窓の私たちにはほえみかけるのであった。

中庭の反対側には幅の広い玉石の道か町はずれまで延びており、赤屋根の、背の低い白しっくい住宅が並んでいた。家のすぐ近くの片隅には、時によって病院になったり兵舎になったりする細長い建物があった。この辺の景色は私の記憶ではいつも日か当たっていた。雨降りの日もたくさんあったはずだが、でもわずかに思い出せるのは、光を反射する白い壁と、その平和な片隅にいつまでもたゆたっているような斜陽を浴びたさくらんぼ色の屋根だった。

日曜日の朝になると、台所の窓と開いた戸口からさし込んで来る太陽は食堂の赤い床の上に暖かな泉のように広がり、大広間の鏡とテーブルの上の水晶の花びんはきらきら輝いていた。朝のししまの中で、兵舎からは歌声が、教会からは鐘の音が流れて来た。抵抗しがたい安らかな、幸福な気持がからだを駆けぬける。そして私は、今すぐベッドから跳ひ出して部屋の中を踊りまわり、歌ったり叫んだりして家中の者を起しなさいとせき立てられているような気がした。でも、もちろんのことそんなことをする勇氣は全くなかった。両親が起きて朝食の合図のベルを鳴らすまで朝のしじまは破ってはならないのである。それに、食事のことを考えただけで私のよろこびはべしやんこになり、壁のほうに向き直って、なんとかして眠りたいものだ、ステファがセモリナ（硬質小麦の粗粉で作る上質小麦粉）を入れたお皿を持ってあらわれる瞬間を少しでもおくらせたいものだと思う。生れてこの方、九年間というものの、これが私の毎日の朝食だったが、私はいやでたまらなかった。母は何も食べたがらない私の口にこれほと手っ取り早く押し込めるものはないと言い、どんなにわけを説明しても、歎願しても、吐き出しても、考え直そうとしなかった。もつと手っ取り早くするために、私は起きたとたんに、また時

にはまだ起きないうちからセモリナを食へさせられた。それでその日の第一印象か、私の口を開ける熱いスプーンと口に注ぎ込まれるべとべとのおかゆになってしまうことかよくあった。

私はむつりして、避けられない宿命を待ちつつ、なんでもいいから天災か割り込んで来てこの不運を免れさせてくれるといいと思っていた。セモリナか買えないくらい家が貧しければよかったのに……。堅いパンの皮一枚と、コップに水一杯もらえたらさぞうれいだろうに……。ステファを見ると私は溜息をついて朝の挨拶をした。

「お早う」とステファが小声で歌うように言う。「目が開いたとたんにもうむすかっているのね。でも、なんてかわいいんでしょ！　ほんとに何もかも恵まれてるんだから、ありかたいと思わなきゃ駄目よ。世の中にはね、お嬢ちゃんが捨てるものをいただきたいと思う子がたくさんたくさんいるんですよ。どうしてそんなに恩知らずなのかしら？　近いうちにきつと天罰か下る……」またいつもの話になり、セモリナが注ぎ込まれたが、私は耳を貸さなかった。

貧乏だとほんとによかったのに！　ひもじくて、堅いパンとじゃがいもだけおいしく食へられたらどんなにいいだろう！　日に五回もあんなふにゃふにゃの消化しやすいも

のばかり食べさせるなんて！　あれは私が二歳のときに病気をしてからだが弱くなったということになり、ほかの子供たちの半分も食へられないという理由で特別に用意された食事だ。

二歳のとき、私はいとこたちの田舎家へ遊びにいったことがある。そのとき、熟していないすぐり畑にちよち入っていつて、みつかつてつれ戻されないうちに、すぐりの実をおなかかはちきれるほど食へてしまった。今になって思い出すのは、からだ中かとても大きな痛みの玉になり、それをかかえて暗やみて起きていたことだ。母のすっきり取り乱した顔と、こわがっている自分と、それから突然、古いタクシーに乗せられて町の医院まで救いを求めにいったことか思い出される。

車はエンノンかうまくかからず、がたがた揺れて、あえぎながら、咳をするようにぎいぎい鳴り、真暗な車内は言語に絶する爆音に取り巻かれていた。車が田舎道を揺れ動いていくと、母は私にますますぎゅっとしがみつく。母のあわてふためく心か私に乗り移り、私は今まで経験したことのないほど大きな恐怖と苦痛に沈んでいった。

おとなしくて人なつこかった私は、何カ月かのうちにかんしゃく持ちの暴君になってしまった。母の話によると、

それまではとてもかわいらしくて、健康で、食欲があり、相手にならなくてもひとりて楽しく遊へたそうである。それか病気のために何もかも変った。かかりつけの医者は食餌療法と下剤と流腸で養生させようと試みたか、うまくいかなかった。とうとう私は白衣を着た人を見るだけで火のついたように位き叫び、そばにある家具の下に潜り込んでしまふようになって、ひっかいたりつはを吐いたりしているところを引き出され、治療かすむまで押さえつけられていた。

こんな療法か一年も続くうちに、陽気な丸ぼちの幼児だった私はやせっぽちの疑い深い子になり、よその人を見るなり逃げ出したり、何時間もすねていたり、うなされたり、暗やみやもの音をこわかったりするようになった。そればかりでなく、からだにいいものはすへて拒絶し、「大人」の食へるものを食へさせてくれとせかんだ。母にすれば、そんなものを食べさせたらきつと即死してしまうと思つたことだろう。

そういうわけてセモリナは続けることになった。私の唯一の反抗手段は食へさせられるものを全部吐き出すことだったので、私はそれを夢中でやった。そんな風にして私をどうしようもなく怒らせてしまった家族の者たちは、結局

自分たちも同じように怒ってしまったのである。

合戦は私が猩紅熱になるまでおよそ一年はかり続いた。親戚から推薦された信用の置ける看護婦の補充もついに底をついてしまつていた。来たかと思うと帰つてしまふ者もあれば、私に何も食へさせることかてきなくて帰される者もあった。猩紅熱の斑点が出て来ると、家中が大騒ぎになった。ところで目かまわつて熱か出たある暗い午後ステファがあらわれたのである。私は母かおすおす入つて来た彼女を、見舞に来た友だちだと紹介したのを覚えてゐる。ステファは母のように小振りて、母のようにきちんとした身なりをしており、毛髪は赤茶色で縮れ、緑色の目で笑う、そばかすだらけの丸顔の人だった。となな「お勤め」なのか聞きに来たわけだか、母はステファか若すぎて経験も浅いからこんなむすかしい仕事は無理だろうと思つた。しかし、その日はほかに候補者かあらわれなかつたので、母は彼女か不適当だということをみんなに納得してもらおうと思つてつれて来たのである。その午後、ステファはすつと私に付き添つて、手を取りながら鼻歌を歌つてゐた。ステファのからだから発散する平和な、純真な靈氣か熱に冒された私のからだに染み通り、忘れるところたつた満足感を取り戻してくれた。私は、夕方になつて帰ろうとするステ

ファの服にまつわりついて、ずっといてくれるようにと頼んだ。母は考えあぐんだ末、スタニスラウにステファの荷物を取りにいかせた。

あれから六年経って、私はステファのいない毎日を想像することはできなかった。ステファこそわが母、わが姉、わが腹心の友だった。大好きで大嫌いな人。毎日のように使い古した意中の人。敵意をぶちまけても安全で、許しを乞うても面目を失う心配のない唯一一人の人だった。

父は二人の精神年齢が大体同じだと言ったが、おそらくそんなところだったかもしれない。しかし、純真な彼女は私を貴族のように取り扱って、一日中いっしょに遊び、ゲームを教えたり、母が人前を恥して眉をしかめるような民謡までも教えてくれたりした。そして、そんな歌は歌ってはいけないと言われても、二人ともとうして歌ってはいけないのかわからなかった。

しつけの点では、ステファは初めのうちはどちらかと言うと私の肩を持っていたので、とうとうお払い箱になりそうになった。そうすると私に命令を下すようになり、私は私たち二人をしいたげる者たちに無言で山のような呪いをかけながらも、ただひたすら彼女のためにその命令に従った。

ステファが家に居つくようになると、母はほっとして私の猩紅熱に感染してしまった。そんなことでごたごたしているあいだ中、私のことはすべてステファ任せになり、まもなく私は全快した。

母の病氣はいつまでも直らなかった。肺炎を併発して、見舞にいけるようになるまでには何十日もなかった。私は寝室へ抱いてつれていかれて、ペノドの脇の薄暗い金色のあかりで母の顔を見た覚えがある。その部屋には薬の匂いが充満していた。母は私をとめるようにじっと見ていた。私は自分か悪かったのかしらと思っているうちに、ひとことも言えずにつれ去られてしまった。

母も私も全快すると、父は私か信じられないほど甘やかされたと思つてしばらくは厳格な生活をさせることに決めた。あとになって私はこの時期を「父の監督時代」として思い出したが、しかしふしきとそのころのことは、幾つかの鉄則かてきていたこと以外、何も覚えていない。その鉄則は二、三のはっきりした文章で、私が勝手に大人の世界にわけ入る道を閉さすものだった。

「言われるとおりにすること」「何故と問うなかれ」「口答えをするな」この三つは、どんな都合の悪い質問にも、どんないたずらっぽい肩すかしにも、反抗的なまなざしに

も適用される決った返事だった。表情さえも監督されていて、ちょっとした不満の色を浮べるとさっそく罰を与えられた。何か質問したり説明を求めたりすれば、「……だから」やりなさいと厳しく言われた。

「私がそう言ったのだからやりなさい」と、母はいつも突然、怒りに顔を赤らめて言うのであった。父のほうはとうかと言うと、私は父の権威を疑うような犯罪行為をしようなどとはおよそ考えたこともない。そんな考えは、生れると同時に、私の知識の光に当る間もなく窒息させられてしまったに違いない。

そういうわけで、私は早くから自分の内側へ押し戻されてしまった。私の心は私の秘密の園となり、私はそこで自由に、規則にとらわれずに、薄着のままであばれまわることができた。そこで私は叫んだり、戸をばたんと締めたり、はだして水たまりを跳び歩いたりできたのだ。

子供部屋の窓カラスに鼻を押しつけて外の世界をじっと眺めているうちに、私は、灰色のぼろを着て、寒くて、ひもしくて、寄る辺ないみなしごの自分か雨の中で迷子になっている姿を見る。そんなことを考えただけで心地よいわななきが全身にみなぎって来る。食へものも、靴も、外套も、もちろんのこと手袋もなんにもない私。公園で遊ぶと

きてさえはめていなければならないあの憎らしい白い手袋のない私！そして、誰からもあれをしてはいけないこれをしてはいけないと言われない私……。私の目はいじらしくもまたよろこばしい涙で焼けただれる。

子供部屋の濃い黄金色のカーテンの後ろに見える通りは活気でわなないていた。ばかばかと耳慣れたひずめの音を立てていく馬たち。玉石の上でいきいきかたがた揺れる車輪。ときには車かひゅうつと跳んでいくこともある。一定の間隔を置いて長距離バスが丘をあえぎあえぎ上って来る。家のすぐ外から町の真中を通して田舎まで続いている長い道を、バスはエンノンがうまくかからずはあはあ言いながら這うように進んでいく。遠くからバスが近づいて来るのか聞えると、私も緊張して、ギアを変えて苦心惨憺進んで来るバスといっしょになって走ってみる。バスはそれからあらたに張りつめたようなかん高い音を立てて上り道にさしかかる。私は不安にからだをこわばらせ、排気ガスの耳をつんざくような音を待っている。

もの心がついてからは、私は騒音か耳にこたえて、戸をボタンと締める音や辻馬車の御者がびしゃりと鳴らすわちの音を聞くと、真青になって縮みあかったものである。家のユノクが台所で薪を割っているとき、私は自分の部屋に

隠れて、枕の下に潜り込んだ。雷雨は全く恐ろしい試練だった。雷が鳴ると、ステファの顔も、神経質な母も、みるみる恐怖に包まれた。嵐が近づけば、ステファは真青になって心配し、大急ぎで見渡す限りの鏡や金属製の物体を片づけたり覆いをかぶせたりする。そして窓を締め、電気の元栓を切り、ろうそくを持って来る。稲妻かひらめくと、ステファと母は、中心にどれほど近いか知りたいと思って時間を数え始めるのであった。雷が近くて鳴れば、ステファは十字を切って声をひそめて祈り、母は不機嫌な顔をして、こわがらないようにと私に言いながら部屋の中を歩きまわった。

しかし、いくらびくびくでも、このように女だけで集まっているよりは父か加わるほうがよかった。父は何ものも恐れなかったし、胆をつぶしたりする者にはかんかんになって怒った。父はいつも嵐の真最中に窓を開けて、「このみごとな眺め」と言っては感嘆していた。そればかりでなく、父は私もいっしょに感嘆させたいと思って自分の脇に立たせ、私か手で耳をふさげないように私の腕をつかみ、ひるんだり泣いたりすれば私を叱った。あげくの果てには母がなかば無意識に私を助けに来た。母の顔は恐ろしいのと涙をこらえるのとてすっかりこわばっていた。嵐が通り

すぎると私は必ず頭痛が起きてみじめになり、何時間も気分がすぐれず、勇気のない自分がぐちゃぐちゃなり恥ずかしくもなるのだったか、父は母かひとりっ子を弱虫に育てたと言つてがみがみ怒りながら家の中を歩きまわった。

しかし辛い嵐はたまにしか来なかったし、何かあっても父を思う愛の炎は弱まることはなかった。私は父を頭から崇拜していたので、ほかの子供たちに父の自慢をして、みんな一度でも父に会えばその魅力のとりこになるのは当然だと思った。

年に一度の誕生日に母はパーティーを開いてくれた。夕方まで家は子供でいっぱいになった。母は子供が嫌いて、私が友だちの家へ遊びに行くことも家へ友だちを呼ぶこともめったに許してくれなかったので、誕生日は実にすばらしい機会だった。私は何週間も前から興奮しきっていた。午後の初めのほうは、お客様たちが到着して私がプレゼントの包みを開く瞬間はもちろん別として、まあいわけ中位に大切な部分だった。父は食事中は大抵引込んでいた。私は友だちが、山のようなお菓子と果物を平らげ、テーブル掛けや自分たちの服にチョコレートをこぼすのを見ていらいらしていた。ぞっとするようなフラッシュを焚く写真屋がやって来ると、いつも大抵全部ぶちこわしになる。私